

筒粥神事に見る雑穀

川上 香

江戸東京博物館

Millets in the Shinto ritual of Tsutsugayu, a kind of porridge

Kaoru KAWAKAMI, Edo-Tokyo Museum

1 はじめに

1月15日の小正月にコメや小豆粥を煮て、粥に入れた棒につく量などから作物の出来を占い、豊作を願う行事は、かつて家々で全国的に行われていた。また、集落や神社などでは竹や葦などの筒を占う作物の数だけ入れて粥を煮込み、筒の中の粥の量などで豊作を占う作占いも行われてきた。

平成21年2月14日長野県飯田市上村中郷で、作占いの神事である、管粥の神事を見学させていただく機会を得た。中郷は山深い急峻な場所にあり、厳しい気候条件の中で人々は生活してきた。このような環境の中で、人々は作物とどのような関係をもっていたのであろうか。占い

から見える山村の暮らしと雑穀について考えてみたい。

2 遠山中郷正八幡宮の管粥神事

遠山の上村中郷、正八幡宮に伝承されている管粥の神事は、ウルチアワのカユとスズダケ（篠竹）によって、旧暦の小正月に近い日に、その年の農作物の出来を占う神事である。精白されたウルチアワを3合と、藁縄で結束され簾状にして丸められたスズダケ37本、それが浸る程度の水を3升鍋に入れ、カユを煮て、スズダケ1本1本にどれくらいの量のカユが入ったかによって占いを行う。



写真1 中郷管粥の神事

このように、小正月にカユを煮て、篠竹や葦などを入れて煮込み、筒の内部の状態ですべて1年の作占いを行う行事は全国で見ることができる。かつては家族や集落で行ったものもあったが、今では、神社の神事として継続されていることが多い。それらはコメのカユか、コメとアズキのカユであるのに対し、遠山の管粥神事ではウ

ルチアワを用いてカユをつくる。コメのかわりに常食としていたウルチアワによって行われることと、今では栽培することが少なくなったウルチアワを神事のために氏子や宮の崇敬者が種継ぎをしているという、大変貴重な行事となっている。

この管粥ではどのような作物が占われてい

るのであろうか。以下は占いの結果を表としたものである（表1）。

大根	ささげ	もろこし	茄子	煙草	桑	蚕	ひえ	きび	木綿	糯米	米	糯米	粟	小豆	大豆	えんどう	麻	小麦	大麦	
八分	七分	五分	五分	七分	八分	八分	九分	七分	八分	五分	五分	五分	八分	八分	七分	九分	八分	九分	八分	
				世の中	降り	照り	晩生	中生	早生	なんばん	栃	栗	柿	楮	胡麻	かぶな	夕顔	牛蒡	芋	荳
				六分	八分	八分	八分	七分	六分	七分	七分	八分	八分	六分	七分	九分	六分	七分	七分	七分

表1 中郷正八幡宮 管粥

禰宜経験者の方によれば、自分の代では、占う作物の項目はずっと変わっていないとのことだった。占う順番についてうかがったところ、なぜオオムギが一番にくるのかわからないが諏訪から伝えられたとも言われているため、諏訪のやり方を参考としたのではないかとのことである。オオムギ、コムギ、ダイズ・アズキ

と続き、その次にアワ・ウルチアワ・コメの順で占われている。作物の実り順であるのか、それとも大切な作物の順なのであろうか。

そこで、神事の占い順に共通点があるのかどうか、いくつかの神社に伝わる平成 21 年度の筒粥神事の目録を比較し、雑穀の順番を中心にまとめてみた。

3 作物の項目と雑穀

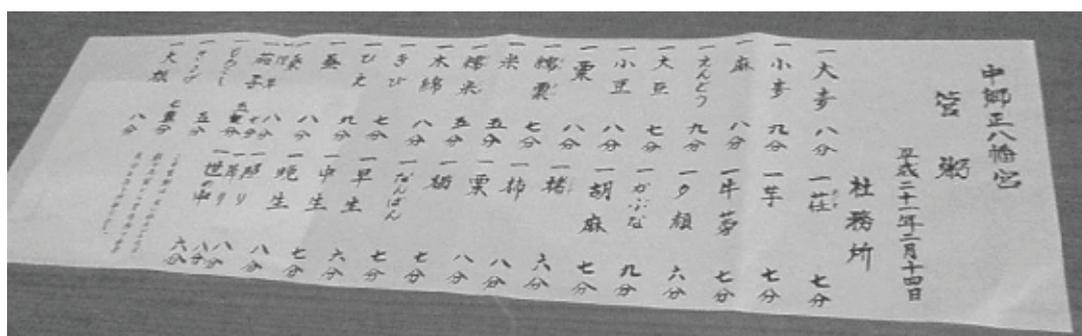


写真2 遠山 中郷正八幡宮管粥

自らが地区の作物について管粥神事を行うものである。この地区だけで大切に栽培され、より人々が豊作かどうかを知りたい項目が、具体的に反映されていると思われる。中郷も馬上地区も、急傾斜の谷間や山腹にある地区であり、かつては焼畑が営まれていた。このような環境の2地区では、アワをモチ・ウルチに分けたり、アワ・ヒエを早生晩生に細かく分けて占っている。アワやヒエが大切な作物で、かつ多種類を栽培していたことと、その出来に関心が払われていたことがわかる。中郷ではコメもコメ・ウルチマイに分けている。ここでのコメはモチゴメのことであると思われる。少ない水田でコメを作る際、購入するとコメより高いモチゴメの方を栽培したと新潟の山村でうかがったことがある（新潟県旧朝日村三面80代男性）。中郷ではどのようにコメも栽培していたのか、今後の調査が必要である。

中郷では現在、アワ・ヒエを常食にしている人はいない。例えば中郷のヒエは、栽培をしている人を一人しか確認できなかった（2009・2・15 80代男性）。しかし、占いから外されないということは、この集落でかつては大切な作物であり、それを外せない心情が多くの人々に残っているからではないだろうか。残された占いの項目は人々のかつての暮らしにかかせない作物リストといえる。中郷・馬上の占いにしかないエゴマ、かつて盛んに栽培されていたであろう麻、採取して食していたトチも占いの項目に入っている。馬上の「なごや」という項目は焼畑などで栽培していた小粒のアズキのことである。作物を早生中生晩生に分けて栽培し、危機回避を行っていた厳しい山村の環境、そして何種類もの種を保全し使い分けていた山村の伝統的智恵までもが占いから見えてくるのである。

馬上では昭和30年代にこんにやく栽培が盛んでゴマの変わりにこんにやくを入れたこともあった。中郷では平成21年度の管粥神事の席で、皆が現在よく栽培しているソバが占いに入っていないので、来年からは入れたらどうかという声が聞かれた。大切な作物が時代とともに変化し、どのように追加されるのか、また入れ替えられるのかは興味深い。

5 おわりに

1784（天明4）年に諏訪大社の筒粥神事に訪れた菅江真澄は、その様子を『すわのうみ』に次のように記している。

「みやしろのこなたかなたに、ほだだきて人あまたあつまりてわらぐつの霜とかしぬ。
- 中略 - かしは手はたはたと聞えて後、しろきたもとのほふり、かの筒やぶりになりはひのよしあしをよばふ。手毎に、つかみじかの筆にて、ふところ紙に書付。こは、よね麦よかりつるよ、ことしは世中ゆたかならん。」

社のあちらこちらに多くの人があつまり、薫ぐつで霜がとけるほどで、実りの良し悪しが発表されると、皆、手に手に筆をもって懐紙に結果を書きつけているというのである。人々の真剣さや、いかにこの占いを大切にしていたかが伝わってくる。

今後、聞き取りを行ったり、作物栽培の歴史を詳細に検証して、人々の作物への思いを更に深く探していきたい。

参考文献

『小鹿野町馬上のクダゲエ（管粥）』2006 小鹿野町教育委員会